

所属・資格 哲学科・教授

申請者氏名 古田 智久

<p>研究課題</p>	<p>唯物論と物理主義に関する歴史的研究</p>
<p>研究目的 および 研究概要</p>	<p>「心的なもの the mental」、すなわち（持続的・準-実体的なものとしての）「心 mind」や（その時々での現れとしての）「意識 consciousness」をどのようなものと理解するかという問題に対する一つの考え方として、「唯物論 materialism」ないしは「物理主義 physicalism」がある。これらはいずれも、簡潔に言えば、心や意識を、脳ないしは神経系の活動と同一視する立場であり、現在では、両者は同じ主張と見なされている。しかしながら、それぞれの起源はまったく異なる。唯物論の考え方は、デモクリトスの原子論にまでさかのぼることができる。哲学史的には、唯物論は、20世紀には、心理学の行動主義（哲学ではライルの論理的行動主義）、スマートやアームストロングの心脳同一説などをその代表的立場として展開されたとされている。他方、物理主義は、20世紀前半に論理実証主義者が、「科学的世界把握 Wissenschaftliche Weltanschauung」及び「統一科学 Einheitswissenschaft」という目標を達成するために考案した考え方であり、元々は、自然科学や社会科学の文（命題）をプロトコル文（命題）に変形・還元するというプログラムを意味していた。本研究では、唯物論と物理主義の歴史をたどり、両者がどのような経緯で同一の主張と見なされるに至ったのかを明らかにする。</p>
<p>報告の概要</p>	<p>本研究では、心の哲学における「唯物論」を考察の対象としているため（マルクス主義的唯物論等、唯物論には他のバージョンもあるが）、それを「世界に存在するものは物的なものであり、心的なものは物的なものと同じである」という存在論的主張と理解する。それゆえ、このような唯物論の立場は、心的なもの存在を認めないわけではなく、物的なものをより根源的な存在者と見なす立場である。こうした現代の唯物論の歴史的先駆としては、感覚や思考といった心的な作用の存在を認めたデモクリトスの原子論や、思考や情念を脳の働きと捉えた18世紀のラ・メトリの人間機械論を指摘できるかもしれないが、一般に、現代の唯物論は、1950年代後半から1960年代にかけて支持者を集めた「心脳同一説」をその起源とし、心脳同一説をリサーチプログラムとして（その周辺で）展開されてきたと考えられている。</p> <p>他方、「物理主義」は、ウィーン学団が「科学的世界把握」及び「統一科学」を目指して、科学や日常生活における（有意味な）主張を表現するための統一言語を構成するという目論見のなかで示された立場である。ノイラートは、生物学、心理学、社会学を含む科学全般を統一（された一つの）言語によって表現するためには、（初期カルナップが考えたような）現象主義的言語ではなく、物的対象を表す語彙を含む言語を用いる必要があると考え、このような立場を「物理主義」と名付けた。また、ノイラートと論争し自らの思索を洗練・深化させていったカルナップによれば、物理主義は、「物理学において用いられる語彙が科学のすべての領域においても用いられるべきである」という主張（科学の物理学への還元）ではなく、「物理的言語が、科学のすべての言明がそれへと翻訳されるところの普遍言語であり、科学の基礎的言語である」という主張である。</p> <p>以上のように、ノイラートやカルナップによって主張された当初の物理主義は、個々の科学の文を翻訳する基礎的な言語を洗練・整備するという趣旨の哲学における方法論的主張であったが、それがいかなる経緯で唯物論と同義の存在論的主張に変容していったのであろうか。ノイラートやカルナップと同様にウィーン学団のメンバーであったファイグルが、アメリカに渡った後に（1950年代に）心脳同一説を擁護する際に物理主義を採った。ファイグルの物理主義は、科学において心的なものを表現するためには中枢神経系の過程を表す用語を用いるべきであるという主張であり、これはウィーン学団の考え方を継承するものと見なすことができる。ファイグルと同時代に心脳同一説を展開したスマートも、当初は物理主義を語り方の問題としており、また、スマートと同様に「オーストラリア唯物論」の代表的哲学者であるアームストロングの1960年代の著作においても、心的状態を中枢神経系の状態と同一視する彼自身の立場はもっぱら唯物論と呼ばれていた。しかしながら、この時代から、物理主義という立場（概念）は、科学の統一（基礎的言語への翻訳）というコンテキストにおいてではなく、心の哲学の領域で主張される（用いられる）ようになり、1980年代から1990年代にかけて、徐々に「心的なものは物的なものに還元され、心的過程は物的過程に還元される」</p>

		<p>という存在論的還元主義を意味するものとされるようになっていった。こうした（歴史的な）プロセスを経て、21世紀の現代では、物理主義は、「すべてのものは物的である」ないしは「すべてのものは物的なものにスーパーヴィーンする」という存在論的な主張とされるに至り、それはもはや唯物論と同義の主張と見なされるようになったのである。</p> <p>以上概略を述べたように、本研究により、当初は唯物論とはまったく異なる主張であった物理主義が唯物論と同義の主張となるに至った歴史的過程が明らかになった。</p>
	<p>研究 の 考 察 ・ 反 省</p>	<p>本研究の反省点としては、物理主義が唯物論と同義になった時点ないしは文献を明確に特定できなかったことを挙げることができる。（本研究では、方法論的な主張であった物理主義が、徐々に存在論的主張へと変容していった歴史的プロセスを明らかにすることどまった。）</p>
<p>研究発表 学会名 発表テーマ 年月日／場所</p> <p>研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者</p>		<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>今年度は、本研究と並行して、クワインの「存在論的相対性」という考え方を批判的に検討する論文（令和2年3月20日現在未完成）の執筆にも注力していたため、本研究の成果物を公表することができなかった。</p> <p>次年度以降、本研究の成果となる論文を発表予定である。</p>